

いのちの大切さについて考えるとき、見過ごせない問題があります。ここ11年連続で年間3万人を超える自死(自殺)者が出ていることです。悲劇を繰り返さないための真剣な試みを始めた団体「自殺対策に取り組む僧侶の会」代表、藤澤克己さん(48)に聞きました。

(渡部裕明・産経新聞東京本社論説副委員長)

「自殺対策に取り組む僧侶の会」代表

藤澤克己さん

—日本の自死(自殺)者は今年3万人を超えました。その数は増えこそすれ、減る様子はありません

藤澤 おっしゃる通りです。自殺される方はもちろん、残念ですが、遺された家族にも深い傷を与えます。「なぜ自分が救えなかったか」という自責の念です。だから、二重の悲劇となるわけです。

*

—会を立ち上げた理由を、お聞かせください

藤澤 毎日、100人もの方が自殺する社会は健全ではありません。これを何とかしたいと思ったのが第一です。もうひとつは、自殺対策の運動をするにも、もっといいやり方があるはずという気持ちがありました。私は寺の出身なのですが、大学を出て20年間、サラリーマン生活を送りました。どうすれば組織をまとめ、効率的に物事を進められるか経験してきたので、それを活かしたかったのです。

—自殺対策の運動は、まだ歴史が浅いのですか

藤澤 昔から個々の努力はありました。しかし、まとまった運動にはなっていません。私がこの問題に関心を持ち始めた2005年9月、世界自殺予防デーの緊急フォーラムが東京で開かれました。その後、超党派の国会議員の活躍によって翌年、「自殺対策基本法」が成立したわけです。私はこの時、NPO法人「ラ

イフリンク」(清水康之代表)にいて、10万人の署名を集める事務局をつとめました。

*

—そして、僧侶の会を結成した

藤澤 2006年12月までに、私を含め3人の僧侶がライフリンクに入会しました。いろいろ話すうち、「僧侶でも、できることを積み重ね、僧侶だから、できることをめざそう」と一致したんです。いまでは東京とその近郊だけで26人のメンバーがいます。宗派も曹洞宗や日蓮宗、浄土宗など、さまざま。今年中に大阪や名古屋でも同志が旗揚げする予定です。

—具体的には、どんな活動をされているのでしょうか

藤澤 3本の柱があります。ひとつは「手紙による相談」です。死にたいほどつらい思いをしている人や、自死遺族に思いのたけを綴ってもらい、私たちが返事を書く。もうひとつは、「追悼法要」です。自殺に対する思いは複雑で、素直に追悼できる場を私たちがつくることにより、いのちを見つめ直す機会になります。3つめは「遺族の集い」。大切な人を自殺で失った家族や友人、恋人といった人に集ってもらい、さまざまな気持ちを分かち合うものです。

*

—自殺を防ぐ決め手はあ



ふじさわ・かつみ 1961(昭和36)年、東京都生まれ。早稲田大学を卒業後、コンピューターのシステムエンジニアとして働く。2006(平成18)年に退職し、港区にある生家の安楽寺(浄土真宗本願寺派)に入る。2009(平成21)年5月、同寺住職を継いだ。

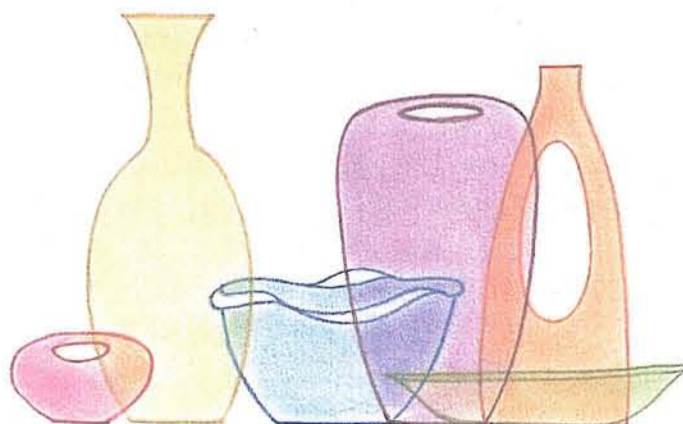
るのでしょうか

藤澤 死にたくて自殺する人はいません。「生きたい」のに、いのちを絶たなければならぬ気持ちになる。それはその人を取り巻くさまざまな環境が、いつの間にか追いつめてしまうからです。「がんばれ」といって泣き言を許さなかったり、そうしたことがプレッシャーになって、いのちを絶たざるを得なくなってしまう。つらい思いをしている人には、「悩んでいいんだよ」「失敗したっていい」「いまはゆっくり休もうよ」という働きかけが必要です。

—自殺対策としてどんなことが必要ですか

藤澤 自殺対策として、誰でもいまできることがあります。ひとつは偏見や無関心を捨て、実態を正しく知ること。2つめはつらい人の気持ちを受け止め、寄り添うこと。3つめは一緒に考え、ともに行動することです。自殺対策は「入り口」です。自殺をしなくて済む社会は人間がよりよく生きることのできる社会ですから、そのためには社会全体の価値観や倫理観などを少し見直す必要があると、私たちは考えています。

自殺をしなくて済む社会は、人間がよりよく生きる社会であるはず。



「自殺対策に取り組む僧侶の会」への連絡は
<http://homepage3.nifty.com/bouzsanga>
 手紙相談のあて先は
 〒108-0073 東京都港区三田4の8の20 往復書簡事務局